

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 17 CONTENTS

About human bones from the Jomon period excavated
in Kagoshima Prefecture

Tatsumi Yubasakir

Introduction of excavated materials at
the Hoshizako site, Kajiki-cho, Aira City (1)

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

Some consideration about of sue ware in the Middle Ages
in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Sin

Characteristics of Distylium racemoum and
excavated materials and folklor materials

Higashi Kazuyuki

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the
5nd year in Reiwa.

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2024

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第17号

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について
—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸

令和5年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2024. 12

研究紀要

年報

縄文の森から

第17号

二〇二四

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第17号 目次

鹿児島県出土の縄文時代該当の人骨について—出土遺跡や人骨の集成と概要—

湯場崎 辰巳・・・・・・ 1

始良市加治木町干迫遺跡の出土資料紹介（1）

鹿児島県立埋蔵文化財センター・・・・・・ 23

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討～特に貯蔵具に着目して～

上床 真・・・・・・ 52

イスノキの特長と出土資料および民俗資料例

東 和幸・・・・・・ 63

令和5年度年報・・・・・・ 77

鹿児島県出土中世須恵器の若干の検討 ～特に貯蔵具に着目して～

上床 真

Some consideration about of sue ware in the Middle Ages in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Sin

要旨

本県出土の中世須恵器の一部について集成・分類を行ったうえで整理・検討し、中世前期に属するもの以外に中世後半のものも存在することを確認した。また、県内の産地を探る必要があることも指摘し、今後の課題とした。

キーワード 中世須恵器、甕・壺、亀山、樺番城（樺万丈）、格子目タタキ、山形状タタキ、窯跡の探索

1 はじめに

須恵器は、『日本考古学用語辞典』によれば、「土師器に対比して用いられる。古墳時代やその後奈良・平安時代に存続した容器。土師器が素焼であることと異なり、穴窯により還元焰で焼成され灰色や黒灰色青鼠色などを呈し質も比較的堅緻である」（斎藤2004）とされている。

しかしながら、遺跡を調査すると、中世遺物の中に、須恵器の特徴（還元焰焼成・灰色系の色調・外面に叩きが施される等）を有するものの、異なる特徴（比較的軟質・粗雑な胎土・内面に調整なしあるいは刷毛目のみ等）も併せて有するものが含まれることがある。

これらの特徴を有するものを「中世須恵器」と呼称し分類しているが、ここ数年の資料増加と研究の進展などによって、再検討が必要となってきた。本稿では、本県における「中世須恵器」を一旦整理し、今後の調査研究の際のたたき台とすることを目的とする。

2 研究略史

本県におけるこれまでの「中世須恵器」の研究史を全国的な視点も交えながら整理したい。

榑崎彰一氏は、中世遺物について整理し、中世のやきもの全体について、土師器系・須恵器系・瓷器系の3種類に分類した。特に、須恵器系については、(1)酸化焰焼成に転じる須恵器系第1類陶器と(2)須恵器の生産技術をそのまま継承した須恵器系第2類陶器（須恵器）があることを明らかにした（榑崎1965）。

宇野隆夫氏は、9世紀から14世紀の須恵器を「後半の須恵器」として、さらに「12世紀の窯業生産地における中世的転換以前に、その変化が生じる原動力の一つとなった都市（畿内）における需要と流通体制の変革があったこと」を示し、古代から中世への変化を述べた。この段階でも、須恵器は古代から中世へと続くものという理解がなされていたことになる（宇野1984）。

吉岡康暢氏はこの点について、『中世須恵器の研究』

表1 中世土器・陶器分類表(榑崎案)

系列	類別	窯跡	器種	焼成	釉
瓷器系中世陶器	一類	瀬戸・美濃	灰釉陶器生産地 壺瓶・香炉・合子・茶入 ・盤・鉢、片口鉢、碗皿ほか	還元焰	有
	二類	東海各地		碗皿	還元焰
	三類	常滑・渥美・湖西 ・中津川・兼山ほか	甕・壺・片口鉢	酸化焰 還元焰	無 (一部有)
	四類	越前・加賀・北越・飯坂赤川 ・伊豆沼・三本木・白石ほか	甕・壺・片口鉢	酸化焰	無
須恵器系中世陶器	一類	備前・丹波・信楽・伊賀ほか	甕・壺・片口鉢	還元焰 →酸化焰	無
	二類	珠洲・飯坂毘沙門平・亀山ほか	甕・壺・片口鉢	還元焰	無
土師器系土器	一類(土師器)	各地	碗皿、鍋釜	酸化焰	無
	二類(瓦器)	各地(西日本中心)	碗皿、鍋釜	低還元焰	無

表2 中世土器・陶器分類表(吉岡案)

系列	類別	窯跡	器種	焼成	釉	
陶器	須恵器系	A 東播系(神出・三木・魚住ほか)	甕・壺瓶・片口鉢・碗皿、屋瓦	還元焰	無	
		B 十瓶山系(十瓶山、花園)	甕・壺瓶・片口鉢・碗皿、屋瓦	還元焰	無	
		C 亀山系(亀山、樺、別所ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、鍋釜、屋瓦	還元焰	無	
		D その他の西日本型(勝間田、鎌山、下り山ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、碗皿	還元焰	無	
	二類	備前	甕・壺瓶・片口鉢、碗皿、屋瓦	還元焰 →酸化焰	無	
	三類	A 珠洲系(珠洲、北越Ⅰ、駒形、大畑ほか)	甕・壺瓶・片口鉢	還元焰 (一部酸化焰)	無	
		B その他の東日本型(大戸Ⅰ、飯坂ほか)	甕・壺瓶・片口鉢	還元焰 (一部酸化焰)	無	
	瓷器系	一類	瀬戸・美濃系(瀬戸・美濃、初山ほか)	壺甕・香炉・合子・茶入・盤・鉢、片口鉢、碗皿ほか	還元焰	有
		二類	A 常滑・猿投系(常滑、猿投、中津川、兼山、丹波、信楽、越前、加賀、北越Ⅱ、大戸Ⅱ、梁川、伊豆沼、三本木、白石ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、屋瓦、経筒ほか	酸化焰	無
			B 渥美系(渥美、湖西、遠東諸窯、水沼ほか)	甕・壺瓶・片口鉢、碗皿、屋瓦、経筒ほか	還元焰	有
C その他の瓷器系(岡山ほか)	碗皿主体	還元焰	無			
土器	土師器	各地	碗皿、鍋釜(一部片口鉢ほか)	酸化焰	無	
	瓦器	各地(西日本中心)	碗皿、鍋釜、火鉢ほか(一部甕壺)	低還元焰	無	

(吉岡1994)の中で、珠洲焼を中心とした検討を行い、中世の須恵器系陶器について書名にもあるように改めて「中世須恵器」という名称を用いた。

本県においては、持鉢松遺跡の調査など1990年代に至るまで良好な中世遺跡が多くなかったこともあってか、中世の遺構・遺物の調査研究は進んでいる状況ではなかった。

例えば、『大原・宮藪遺跡』(下飯村教委1974)では、東播系須恵器鉢が掲載されている。本県において中世の須恵器が取り扱われた初例である。その後、『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』(県教委1983)で、須恵器の中に「亀山焼の甕」として掲載されている(注1)。『薩摩国分寺跡 環境整備事業報告書』(川内市教委1985)では、中世の須恵器甕が1点報告される。松本建郎氏の指摘として、竜泉窯系青磁との供伴例があることが付記される・他にも破片はあるが実見していないため不明である。

以上のように、1980年代には須恵器の中に中世のものが含まれることは認識され区別されていた。しかし、中世単独時期の遺跡が少なく、同一遺跡から古代の須恵器も出土することがほとんどであったため、あくまでも「須恵器の中に中世のものも含まれる」もしくは「中世陶器のひとつ」という扱いであった。

その後、『新平田遺跡』(大口市教委1997)『山ノ脇遺跡・石坂遺跡・西原遺跡』(2003)などでも、中世に該当する遺物として、須恵器の分類を設けて扱われ、中世の須恵器という認識は明確となっている。

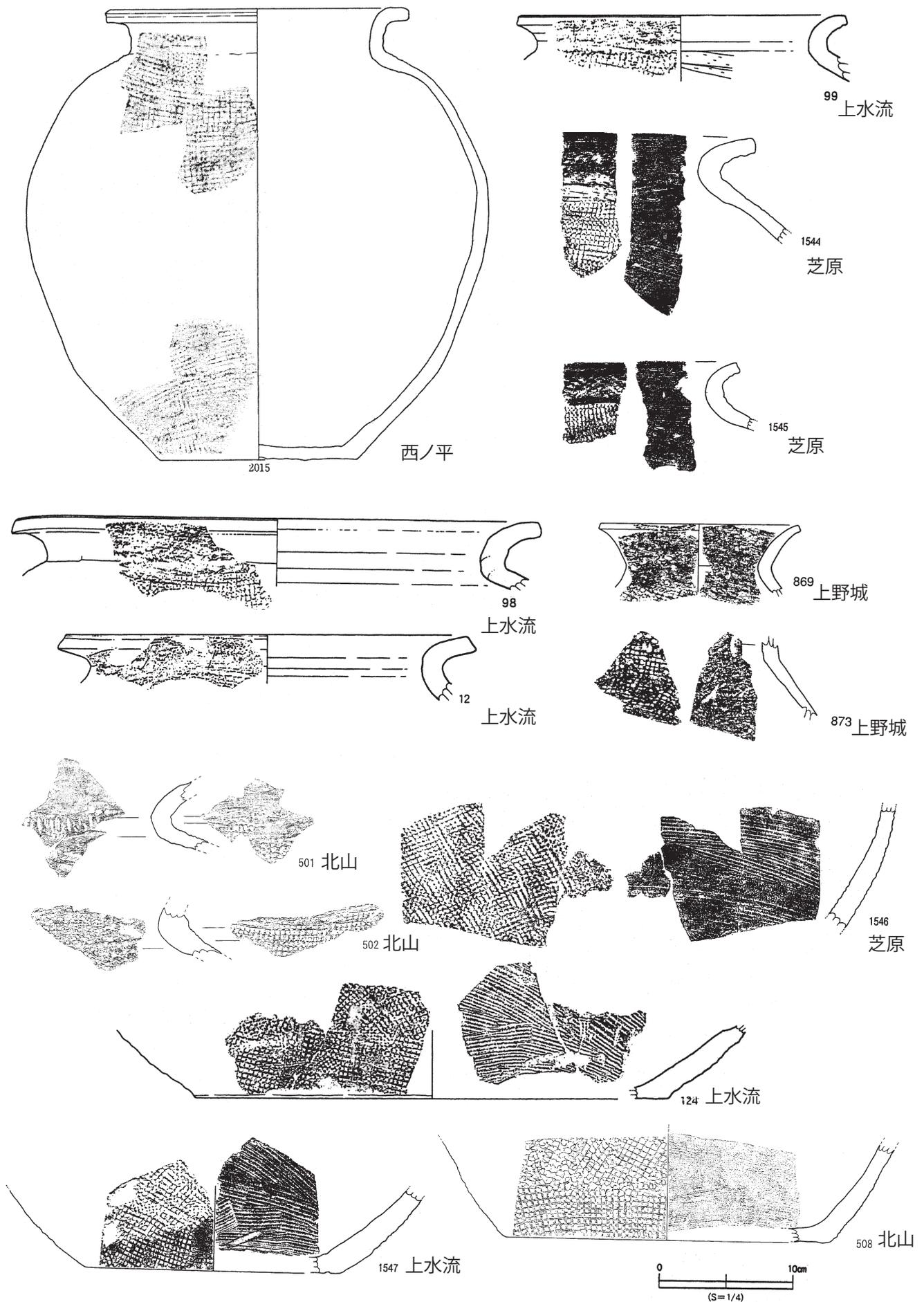
1993年、荻野繁春氏は、西日本の中世貯蔵容器について幅広く調査し、検討している。その中で、薩摩国内の『成岡遺跡』、『薩摩国分寺跡』などでみられる格子目叩き文痕をもつ甕と、肥後地域でみられる特徴的なタタキ(山形文痕)を有する甕について「肥後新型」とした(荻野1993)。

1997年には、『肥後考古』第10号にて「歴史時代各論」小特集が生まれ、美濃口雅朗氏が樺番城窯須恵器(美濃口1997)を、出合宏光氏が下り山産須恵器(出合1997)を論じている。特に、注目すべきは、美濃口氏がそれまで樺万丈とされてきたものについて「樺番城」としたことであり、須恵器の実情も含めて大きな成果となった。

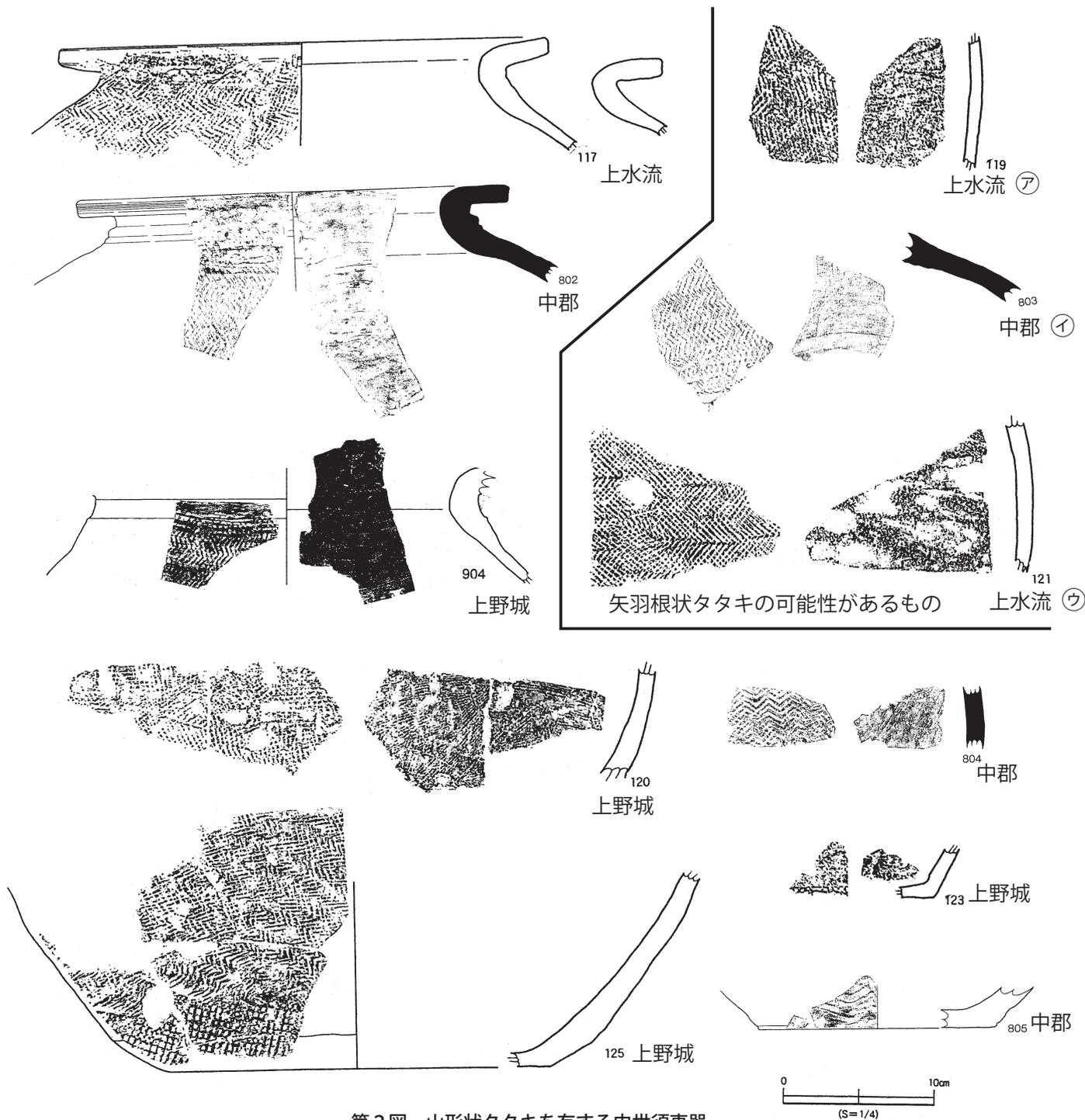
本県において、明確に「中世須恵器」という名称を用いたのは、2004年刊行の『上野城跡』(鹿県埋文2004)が初例である。その後は、『向柵城跡』(鹿県埋文2008)・『上水流遺跡2』(鹿県埋文2008)・『芝原遺跡3』(鹿県埋文2012)などでも中世須恵器という名称が使用されるようになり、現在に至る。

また、中世須恵器の中に、樺番城(この際には樺万丈としていた)産中世須恵器が明確に指摘されたのは、持鉢松遺跡第1次調査報告(金峰町教委1998)が初例である。ただし、美濃口雅朗氏は、肥後地域における樺番

城産須恵器にはない「壺」が薩摩地域で確認されていることから、樺番城産ではない可能性が高いとし、近くに生産地があった可能性を指摘している(美濃口2007)



第1図 格子目タタキを有する中世須恵器



第2図 山形状タタキを有する中世須恵器
(2023)。

(注2)。

2014年に、梅崎恵司氏（梅崎2014）と出合宏光氏（出合2014）は、穴生古屋敷遺跡第3次調査地点（北九州市）が、「大日窯」であり、九州で3番目に確認された中世須恵器窯であるとした。

2023年には、川口雅之氏・肥後弘章氏が『北山遺跡1』（鹿県財団2023）の報告書総括中にて、北山遺跡で出土した「樺番城」とされる須恵器と熊本市博物館所蔵の樺番城産須恵器とを実際に比較した結果、別のものであるという結論を導いている。

また、下高大輔氏と鬼塚勇斗氏は、この際のことも含めて樺番城産須恵器の再検討を行った（下高・鬼塚

美濃口雅朗氏は、『菊池川河床採集遺物報告書』にて、中世須恵器について新たな見解を指摘し、年代観も与えている（菊池川河床採集遺物研究会2023）。

3 県内出土中世須恵器に関する検討

(1) 樺番城・亀山類似須恵器（第1図）

2023年頃まで樺番城並びに亀山とされてきたものについて集めたものが第1図である。これらの特徴として、

- ① 頸部外面以下には基本的に格子目タタキが、内面はナデもしくはハケメが施される
- ② 口縁部は、ア. 頸部で屈曲しそのまま外反するものと、イ. 頸部と口唇付近で外部へと2度屈曲するもの

の2種類がある

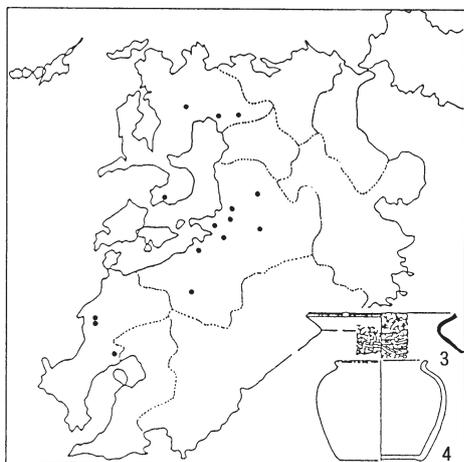
- ③ 口縁部には凹みがあり、ゆるやかな溝状となって巡るものがある
 - ④ 器種は基本的には甕が主であるが、壺もみられる（現状では上野城跡のみ）
- といったことがあげられる。

以上の特徴の中で、①については、樺番城の特徴でもあるが、亀山でも確認されるもので、西日本で確認される中世須恵器には多くみられる特徴といえるものである。次に、②については、アは樺番城および亀山の両者で、イは亀山において、14世紀頃とされるものにみられる特徴である（岡田1988）。③も亀山において14世紀頃とされる特徴である。④は樺番城ではみられず、亀山では少数存在する。

特に②イと③の特徴を有するものについては、上述したように、本県の報告中で「亀山系」とされたこともあった。荻野繁春氏が指摘するように、「消費地遺跡出土資料の中には、地元産と考えられるものもある」（荻野1985）という意見もあり、工人の移動や技術共有などの可能性もある。美濃口氏によれば、「樺番城窯製品については岡山県倉敷市亀山焼との近似性から、亀山焼からの工人招聘などの技術導入が想定されている。」また、その背景については「樺番城窯の創業や亀山焼からの技術導入については小代氏が」倉敷市域の地頭であった庄氏と関係があったことによって遠隔地ながらも行うことができたとした（菊池川研究会（美濃口）2023）。時期については、本県においては明確に示すことができるような事例が存在しないが、荻野氏や美濃口氏が指摘されてきたように、中世前半期の可能性があることを指摘しておきたい。なお、美濃口氏は、樺番城産須恵器については、13世紀中～後半に位置付けており、当該資料も同様の時期のものと考えられる。

(2)「肥後新型」とされる山形状タタキを施す須恵器（第2図）

第2図には、荻野氏が「肥後新型」としたもの（荻野1993）の中で、特徴的なタタキである山形状タタキを



第25図 肥後型分布図

第3図 肥後型分布図（荻野1993）

施すものを集めた。これらの特徴として、

- ① 頸部外面以下には基本的に山形状タタキが、内面はナデもしくはハケメが施される。
 - ② 口縁部は、頸部と口唇付近で外部へと2度屈曲する
 - ③ 口縁部には凹みがあり、ゆるやかな溝状となって巡るものがある
- といったことがあげられる。

概ね、第1図の樺番城・亀山類似須恵器と共通する特徴が目立つが、特に注目されるのは、外面のタタキであろう。本県における類例として、薩摩地方では、上水流遺跡・中郡遺跡群・北山遺跡などで確認することができたが、大隅地方では確認できていない。

美濃口氏によれば、「基本的な技法は樺番城窯製品と同じ一連叩打成形で、本稿で新たに指摘するが、樺番城と同じく外面格子目タタキによる二次成形の後、山形状タタキを装飾的に施すものである。このため、外面頸部など部分的に格子のタタキ目が残し、山形状タタキ目の方向は縦方向に整っている」

熊本県では、高橋南貝塚（熊本県教委1978）や二本木遺跡第27次調査区S D 107（熊本市教委2007）、山田城跡（熊本県教委1989）で出土しており、少なくとも熊本平野から球磨盆地までは確認されていることから、窯跡は不明ながらも肥後国内での生産が推定されている。

また、美濃口氏は、これらの遺跡における出土属性や、頸部が樺番城窯製品よりも強く屈曲する型式的要素などから、概ね13世紀後半～14世紀初頭に位置付ける（樺番城は13世紀中～後葉に位置付けている）。

なお、⑦⑧⑨に関しては類似するもののためここで取り上げたが、矢羽根状タタキあてである可能性が高いモノである。

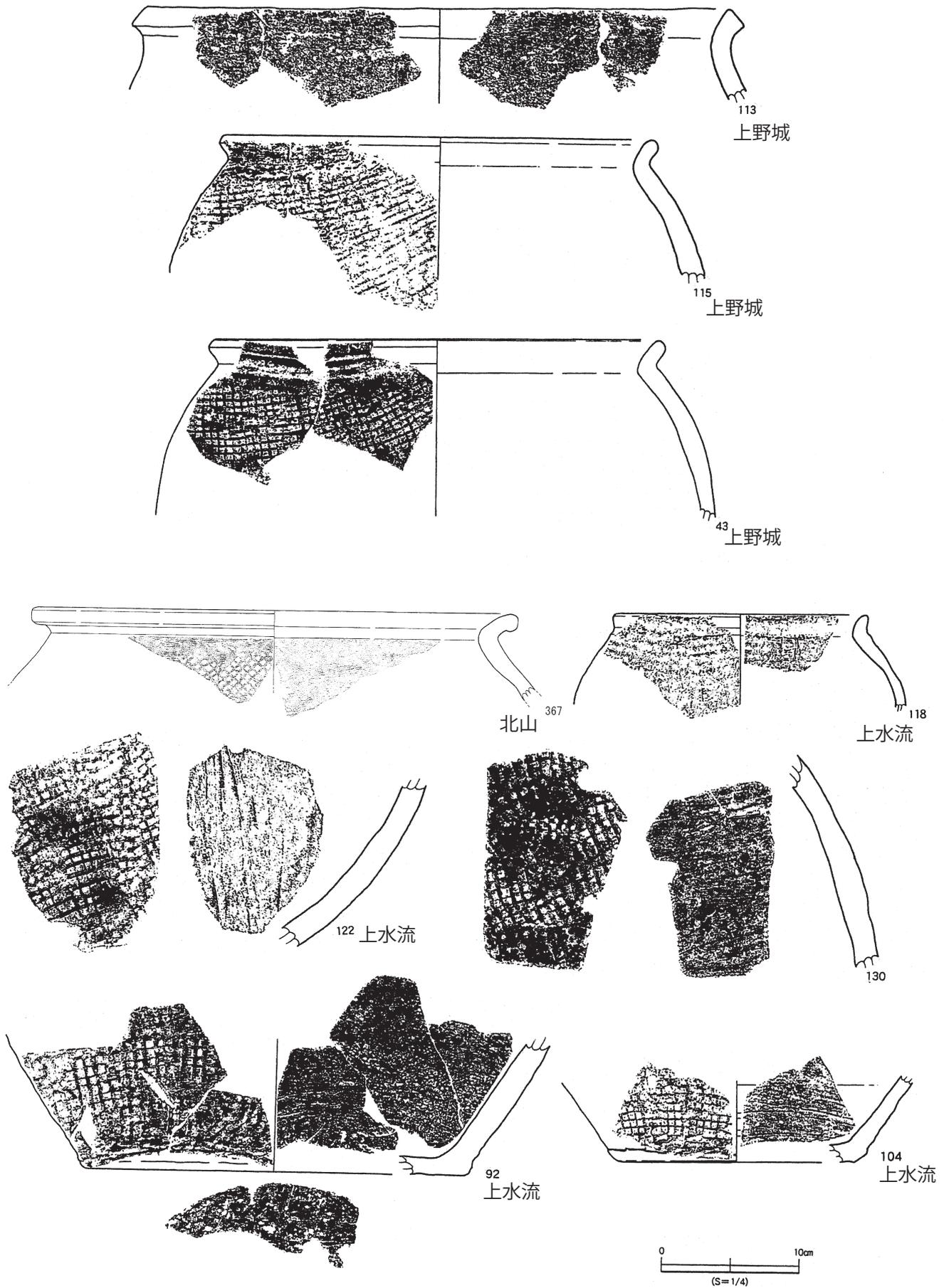
当該資料については、現状では産地不明であるものの、今後さらに増加する資料であると考えられるため、引き続き注視していきたい。

(3)格子目タタキに特徴を有する須恵器（第4図）

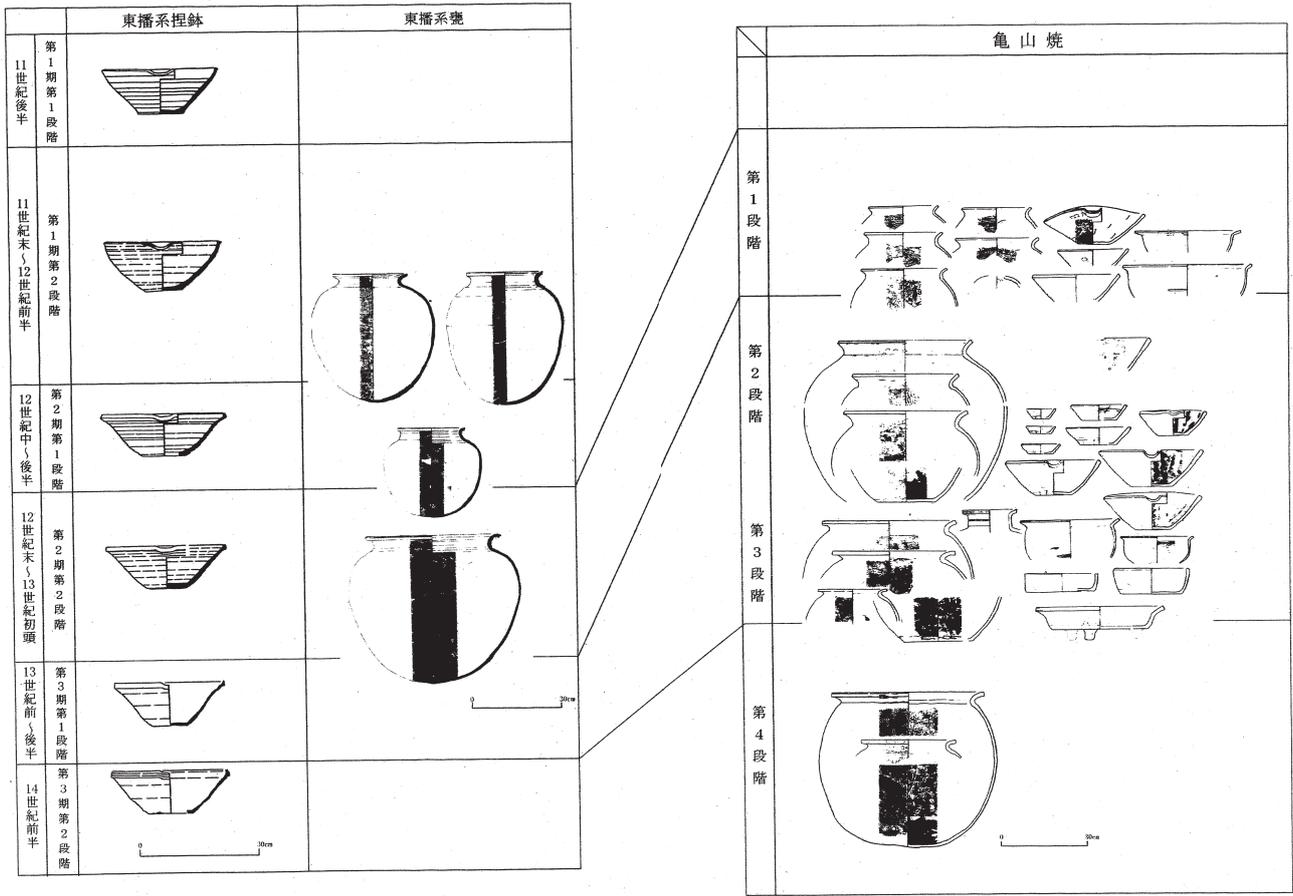
次に、第4図には、これまで樺番城や亀山とされてきたものとも若干異なるものを集めた。これらの特徴として、

- ① 口縁部の屈曲が頸部から直接行われる。頸部から口縁部までが短く、頸部における折り返しの角度が比較的急である。ただし、折り返し部分には、稜（もしくは角）がつくほどではない。
 - ② 口縁端部（口唇部）の調整はほとんど行わない。
 - ③ 外面の格子目タタキの格子の大きさが比較的大きい。
 - ④ つくりは比較的丁寧であるが、胎土が堅緻なものはほとんどなく、砂っぽく、軟質である。瓦質土器といっても差し支えないもの
- といったことがあげられる。

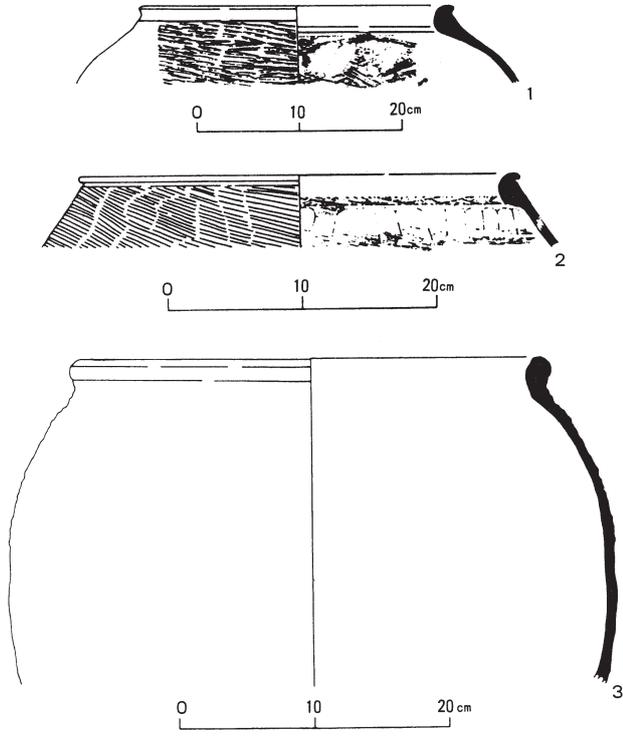
以上の特徴の中で、①・②については、伊藤晃氏は14世紀前半頃（伊藤1978）とし、亀山焼の報告書では12世紀後半以前とされたもの（岡山県教委1988）に類



第4図 大きめの格子目タタキを有する中世須恵器



第5図 龜山窯跡における変遷 (永田・藤野2012)



近畿Ⅷ期 1. 兵庫県伊丹城跡 2. 大阪府天野山金剛寺
近畿Ⅸ期 3. 大阪府堺環濠都市遺跡

第6図 14世紀以降の貯蔵具 (荻野1985)

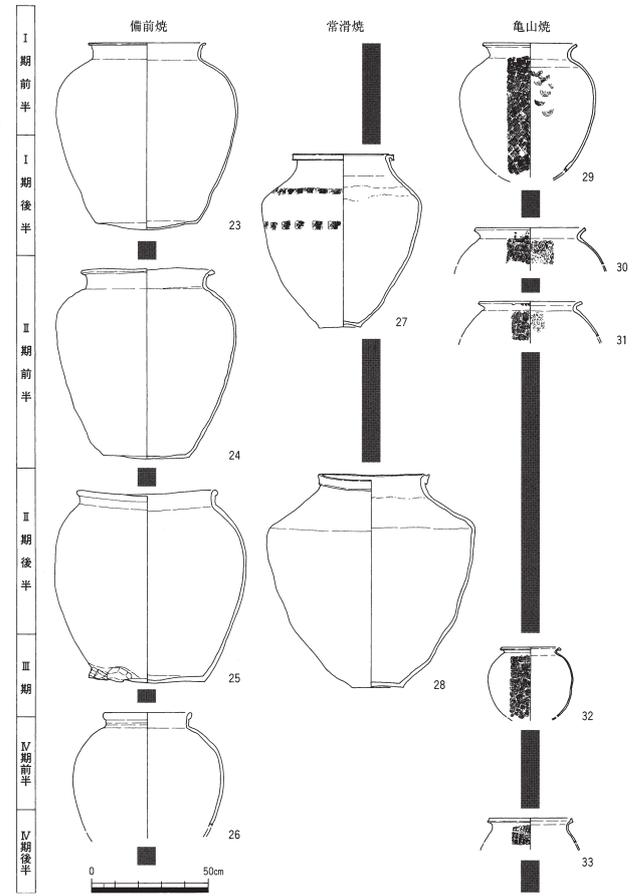


Fig. 2-4 甕の変遷

第7図 草戸千軒における貯蔵具 (鈴木2006)

似する(第5図)。ただし、①～④まで含めた場合には、荻野氏がⅦ～Ⅸ期(Ⅶ期:14世紀後半～15世紀前葉、Ⅷ期:15世紀中葉～後葉、Ⅸ期:16世紀前半)としたもの(荻野1991)、鈴木康之氏がⅣ期としたもの(鈴木2006)が該当する可能性がある(第6図・第7図)。

美濃口氏は、本資料に類似するものについて、「瓦質土器の甕」とし、肥後における事例として「中世の瓦質土器甕・壺は、外面に大きい格子目のタタキを粗く施すものが一般的で、15・16世紀代に位置付けられる。ちなみに、瓦質土器甕・壺は近代まで存続しており、17世紀代前半には無頸・半胴の大形甕が出現する」とした(美濃口2023)。

本県における事例では、年代観を特定できるものは確認されていない。ただし、中世後半期の資料が豊富な上水流遺跡(南さつま市)で多く確認され、中世前半の資料が中心の芝原遺跡(南さつま市)で確認されていないことから、美濃口氏の指摘を支持し、中世後半期の可能性を指摘しておきたい。

なお、当該資料も窯は不明であるが、肥後国内での生産が推定されており、今後の調査・検討及び資料増加も見込まれる資料であるため、引き続き注視していきたい。

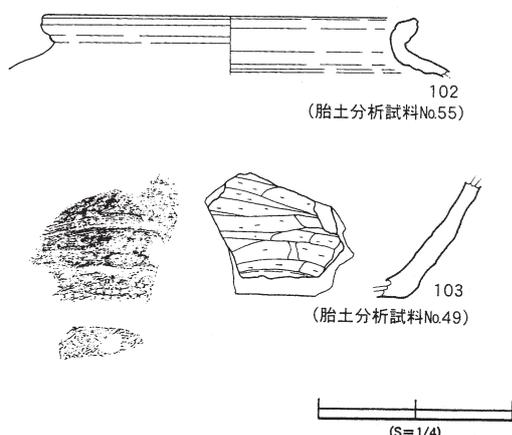
(4)その他(第8図・第9図)

ここでは、特に筆者が関わった遺跡について、中世須恵器としてきたもので実は誤りであったものも紹介したい。

上水流遺跡出土の102と103は、報告の時点では、国産のものと考えて掲載したものである。再検討の結果、国産のものではなく、中国華南周辺で生産された輸入陶器であることが確認された。タタキやあて具などの痕跡が確認できず、堅緻な胎土のものであるのが特徴である。

以上の2点は、報告書作成時点では、須恵器としては違和感があったものの、消去法で須恵器としていたものである。

永吉天神段遺跡(大崎町)では、瓦質土器の壺が確認



第8図 中世須恵器ではなく輸入陶器であったもの

されている。県内においても類例のないものである。今回は薩摩地方における資料が中心となったが、今後は上記資料などと併せて大隅地方における中世の須恵器・瓦質土器なども検討していく必要がある。

また、本資料以外にも、これまでの分類の誤りやその後の研究の進展などによって、当時は正当な評価を与えられずに眠ってしまっていた資料があるかもしれない。引き続き今後も再検討を続けていきたい。

4 分布について

本県における出土遺跡については、表3にまとめた。また、第10図では、県内の出土遺跡について地図上に示した。

本図からは、中世前半期の中世須恵器が薩摩地域に偏在することが理解される。確認されている範囲での南端は万之瀬川流域であり、鹿児島湾奥と志布志湾沿岸でもわずかに確認されている。

ただし、山形状タタキについては、鹿児島湾奥では現状では1遺跡のみでの確認であり、やはり西海岸地域での分布が顕著であることが確認される。

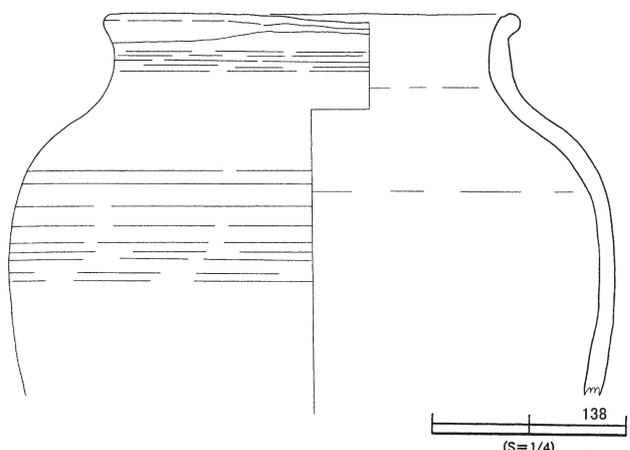
これはあくまでも現状における理解であり、遺漏や今後の調査・研究による見直しが進む可能性があるが、大方の傾向はつかむことができたのではないかと考える。

5 おわりに

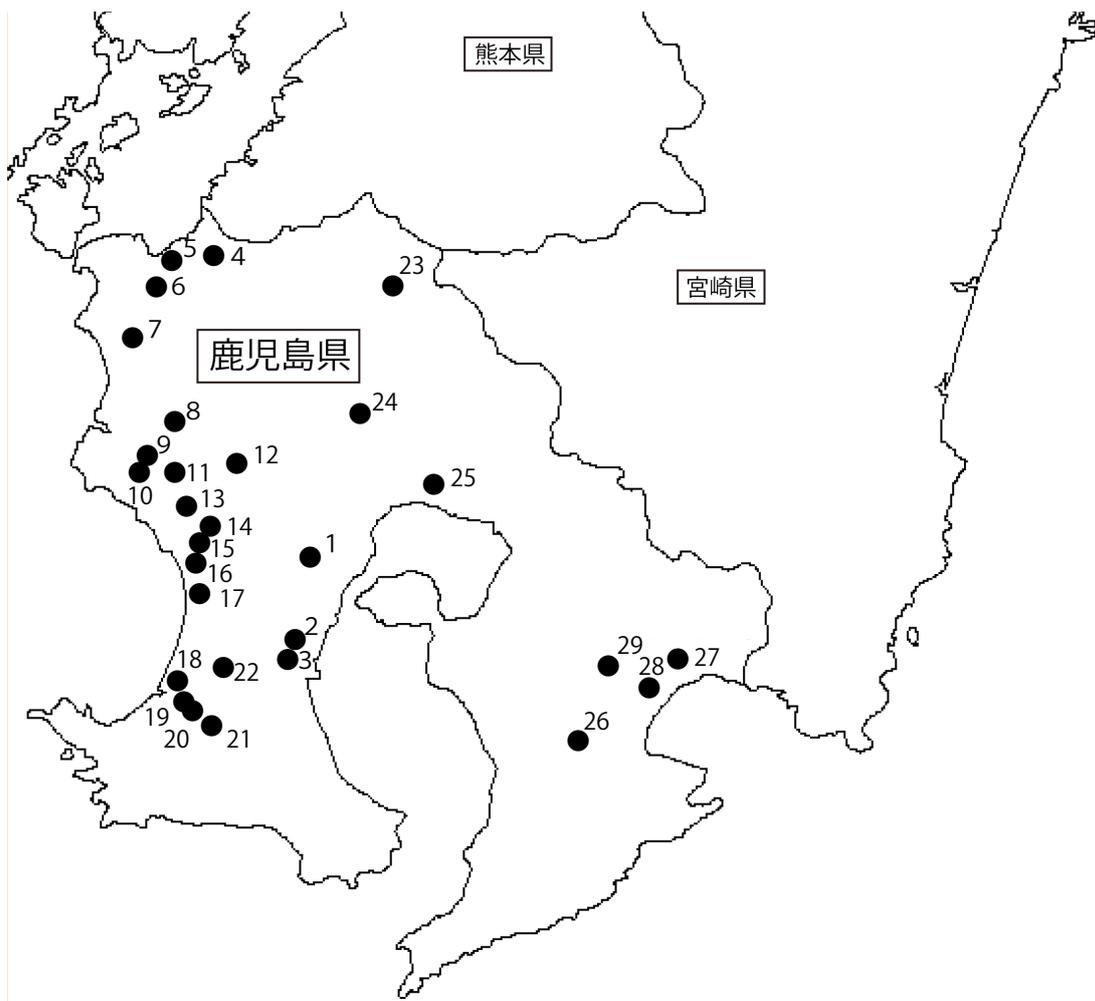
本稿は、令和5(2023)年7月8日に熊本市博物館で行われた「樺番城窯出土品の検討会」に出席して得られた知見を一部含んでいる。

結論として、①これまで本県で樺番城とされてきたものは全て違う可能性が高い ②中世前半のみと考えていた中世須恵器の中には、15・16世紀頃と考えられるものが含まれている ③産地については今後も検討が必要

であり、少なくとも九州内で確認されている窯跡(樺番城・下り山・大日)やその他の類似する窯跡(亀山など)との比較検討や理科学的分析などを進める必要がある。



第9図 永吉天神段出土の15世紀頃とみられる瓦質土器壺



第10図 鹿児島県内出土の中世須恵器分布図

る。特に、山形状の叩きがみられる資料については要検討である。また、本県における生産が行われた可能性の検討や探索も引き続き進めていきたい。

【註】

(註1) 編者の一人である池畑耕一氏によれば、報告書刊行後に、岡山の知人に現物を確認してもらったところ、「亀山焼に類似してはいるが、亀山焼そのものではない」との指摘を受けたという。ただし、類似していることに違いはなく、西日本で出土する中世須恵器の窯跡について、技術の共有や工人の往来などがあった可能性も指摘されている。

(註2) 熊本県内の出土状況から、樺番城須恵器は、広範囲に流通するものではないとされる。実際、熊本市内でも確認例はわずかであるという。そんな中で、鹿児島県内（特に薩摩地方）で多く流通していたとは考えにくく、これらの事例は特殊な事例であるのか、もしくは別物である可能性が指摘された。

また、本県では、それまで樺万丈（かばのばんじょ

う）としていたが、美濃口氏の論考以降、氏の説を支持し、本来の地名（小字名）から樺番城（かばばんじょう）とし、表記も改めている。

亀山焼については、伊藤晃氏によるもの、岡山県教育委員会（岡田氏）によるもの、鈴木康之氏によるもの、永田千織・藤野次史の両氏によるものなどがある。これらの研究では、中世前半期（14世紀後半頃）までは編年・様相などがほぼ明らかになっているが、中世後半については伊藤氏が触れた以外は資料の少なさもあって編年・様相は不明な部分が多い。また、中世後半になると、「亀山焼系」とされて異なる生産地のもので、瓦質になるという指摘もみられる。

【引用・参考文献】

伊藤晃1978「窯業」近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館
 宇野隆夫1984「後半期の須恵器」『史林』67-6
 梅崎恵司2014「麻生氏と中世須恵器“大日窯”」『研究紀要』第28号 財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室
 岡山県教育委員会1988『亀山遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(69)
 萩野繁春1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』第3号 福井考古学会

第3表 鹿児島県内出土の中世須恵器一覧

No.	遺跡名	所在地	①	②	③	備考
1	苦辛城跡	鹿児島市皇徳寺台一丁目			○	
2	北麓遺跡	鹿児島市谷山中央1丁目	○	○		
3	不動寺遺跡	鹿児島市上福元町	○	○		
4	老神・市来遺跡	出水市武本字老神・市来		○		
5	放光寺跡	出水市高尾野町下高尾野字放光寺	○			
6	中郡遺跡群	出水市野田町下名	○	○		
7	北山遺跡	阿久根市山下字北山	○	○		榿番城とは異なることを指摘
8	薩摩国分寺跡	薩摩川内市国分寺町字大都・下台	○			
9	西ノ平遺跡	薩摩川内市中福良町字西ノ平	○			報告書では亀山とされた
10	山口遺跡	薩摩川内市都町字山口	○			
11	上野城跡	薩摩川内市百次町字上野	○	○		報告書では榿万丈とされた。壺あり
12	五社遺跡	薩摩川内市東郷町五社字久留須		○		
13	榿城跡	いちき串木野市川上字門前・榿鼻・大堂庵	○			報告書では榿万丈とされた
14	安茶ヶ原遺跡	いちき串木野市川上字安茶ヶ原		○	○	
15	市ノ原遺跡3	日置市東市来町湯田	○	○		
16	向榿城跡	日置市東市来町伊作田字上榿・中榿・下榿	○			報告書では榿万丈とされた
17	伊作城跡	日置市吹上町中原	○		○	
18	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字白糸原		○		
19	持鉢松遺跡	南さつま市金峰町宮崎字持鉢松	○			報告書（一次報告）では榿万丈とされた
20	芝原遺跡	南さつま市金峰町宮崎字芝原	○			
21	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬字上水流・森山	○	○	○	報告書では榿万丈とされた
22	小園遺跡	南さつま市金峰町	○	○		
23	新平田遺跡	伊佐市平出水字新平田	○			
24	水天向遺跡	薩摩郡さつま町柏原字水天向	○			
25	市頭C遺跡	姶良市加治木町木田市市頭	○	○		
26	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田字益畑	○			3号竪穴遺構からの出土
27	安良遺跡	志布志市志布志町安楽字勢園	?			報告書では東播系とされた
28	後迫遺跡	曾於郡大崎町横瀬字後迫	?			報告書では榿万丈とされた
29	永吉天神段遺跡	曾於郡大崎町永吉字天神				瓦質土器の壺

荻野繁春1992「壺・甕はどのように利用されてきたか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集中・近世における東国と西国 国立歴史民俗博物館
『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 発表資料集・資料集』同シンポジウム実行委員会
鹿児島県教育委員会1983『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書(28)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(68)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2005『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター(86)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2007『持鉢松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2008『上水流遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2008『向榿城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(129)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2009『上水流遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(136)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2010『向榿城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『芝原遺跡3』鹿

児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(170)
川口雅之・肥後弘章2023「中世須恵器の産地調査について」『北山遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)
菊池川河床採集遺物研究会(美濃口 雅朗)2023『菊池川河床採集遺物調査報告書—中世の国産陶器・土器類 中世の石造物 錢貨—』
熊本県教育委員会1978『高橋南貝塚』熊本県文化財調査報告 第28集
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2014『中郡遺跡群』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(1)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター2019『永吉天神段4 第3地点』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(22)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2020『安良遺跡』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(34)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2023『北山遺跡1』(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(51)
金峰町教育委員会1998『持鉢松遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書(10)

斎藤忠2004『改定新版 日本考古学用語辞典』学生社
川内市教育委員会1985『国指定史跡 薩摩国分寺跡 環境整備事業報告書』
柴田亮・上床真・横手伸太郎2022「九州」『新版 中世
萩野繁春1993「中世西日本における国産貯蔵容器の分布」『福井考古学会会誌』第11号 福井考古学会
萩野繁春2005「須恵器系陶器の編年と生産技術の展開」
の土器・陶磁器』真陽社
下高大輔・鬼塚勇斗2023「《資料紹介》熊本博物館収蔵品 樺番城窯跡出土品について－資料の現状把握と今後の展望－」『熊本博物館館報』No.35(2022年度報告)
鈴木康之2006「土器・陶磁器の組成変化」『中世集落における消費活動の研究』（初出は、鈴木康之1996「土器・陶磁器の出土傾向」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 V』広島県教育委員会）
出合宏光1997「下り山研究ノート - 下り山1号窯跡出土品の製作工程を復元する -」『肥後考古』10 肥後考古学会
出合宏光2014「九州の中世須恵器窯」『肥後考古』19 肥後考古学会
出合宏光2007「下り山窯（熊本県）」『中世窯業の諸相生産技術の展開と編年 補遺編』同シンポジウム実行委員会
出合宏光2014「九州の中世須恵器窯 北九州市発見の中世須恵器窯関連資料を中心に」『肥後考古』19 肥後考古学会
出合宏光2024「熊本県における15～16世紀の土器」『琉球大学考古学研究室開設30周年記念論文集』琉球大学考古学研究室
中村和美2007「南九州の土器・陶磁器」『中世窯業の諸相』補遺編
永田千織・藤野次史2012「安芸地方における中世須恵器の研究－西条盆地の出土資料を中心として－」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』3号
榎崎彰一1965「古代末期の窯業生産」『日本史研究』79 日本史研究会
日本中世土器研究会 編2022『新版 中世の土器・陶磁器』真陽社
美濃口雅朗1997「樺番城窯跡の中世須恵器（1）」『肥後考古』10 肥後考古学会
美濃口雅朗2007「樺番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相 生産技術の展開と編年 補遺編』同シンポジウム実行委員会
美濃口雅朗2010「樺番城窯（須恵器系）・下り山窯（須恵器系）」『古陶の譜 中世のやきもの - 六古窯とその周辺 - 』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第17号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2024年12月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
